

■ 第2学期末を迎えて

■ いよいよ第2学期末を迎えました。12月に入って、各学校では、授業参観や学年・学級懇談、また、個別懇談なども行い、第2学期の子ども達の成長の様子をもとに、今後につながる懇談をされていることと思います。

■ 当所では、先月、LD・ADHD等講座を開催しました。今号からその時の講演の概要をお知らせしすることにしました。是非、今後の参考にさせていただきたいと思います。

■※ 演題「発達障がい者の特性を生かした社会的自立」

講師 大阪教育大学名誉教授 竹田 契一先生

昨年の4月から本格的に特別支援教育がスタートしているが、どの学校にも、授業中、教師の話を聞いていないような子がいる。実態調査によると、そのような子が6.3パーセントに上っている。

厚生労働省では、広汎性発達障害(自閉症、アスペルガー症候群を含む)、学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADもHD)を発達障害者支援法の対象として軽度発達障がいとしているが、そのような子が多いという現実がある。

それでは、「何かおかしい子」や「変な子」、授業中に教師の話を聞けない子は、皆、そのような子なのだろうか。その判断をするには、実態把握が欠かせない。

話を聞けない子の場合、次のようなことが考えられるかも知れない。

- 1 聞こえなかった(教師の声量?子どもの聴力に問題?)
- 2 聞いていなかった(不注意?集中力不足?)
- 3 理解できていない?
- 4 今、夢中になっていることがあって、それに気を引かれていたのか?
- 5 その他



その子が、これらのうちのどれに落ち着くかによって全く判断が違ってくる。判断のためには、一人の教師の経験や勘などで判断するのではなく、客観的なデータや発達検査等で客観的に調べて見る必要がある。

その作業を進めるにあたっては、次の点をふまえておきたい。

- 1 児童生徒を一面的にではなく、多面的に見ていくこと
- 2 相手のニーズがどこにあるかを見る視点を持つこと
- 3 個々の児童生徒のニーズがどこにあるかを観察し、分析することで、発達障害以外の課題も見つかることが多いこと



しかし、気をつけなくてはいけないのは、発達障害の多くは、周産期から胎生期に至るまでの未成熟な脳の状態の中で発生し、脳の発達と深く関わっているということである。

※ 今回は、講演のプロローグの部分の載せました。その部分で先生が特に強調されていたのは、「特別支援教育は、すべての児童生徒に効果のあるユニバーサル・デザインである」ということでした。

次号では、竹田先生によるLDをはじめ、ADHD、自閉症についての見方、対応等についてお知らせします。

